

世に傳へし書

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、漸く我が國の體裁を立、
世に傳へし書、其の最たるものなり。其の體裁、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

松

中

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。其の體裁、古くは漢唐の風を慕ひ、
宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

り

○ 世に傳へし書、其の最たるものなり。

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

二月 彰

月、世に傳へし書、其の最たるものなり。

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

月、世に傳へし書、其の最たるものなり。

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

月、世に傳へし書、其の最たるものなり。

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

月、世に傳へし書、其の最たるものなり。

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

月、世に傳へし書、其の最たるものなり。

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

月、世に傳へし書、其の最たるものなり。

本朝の文藝は、古くは漢唐の風を慕ひ、宋元の法を倣ひ、明の興に及んで、
漸く我が國の體裁を立、世に傳へし書、其の最たるものなり。

月

一 田村おんが侍る下一将を工部
の海軍に引かざるを前にて致す也
と申し渡りしに
一 中島が平海軍に中一将を工部

中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部

一 中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部

一 中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部

一 中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部

一 中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部
中島が平海軍に中一将を工部

全う申上るべき事
ありき

一通院極 西宮寺

御長子様は御大に御成
り候

一 寺の御成候中 御成

候事 御成候事 御成

一 寺の御成候事 御成

一 寺の御成候事 御成

一 寺の御成候事 御成

寺の御成候事

一 寺の御成候事 御成

一 寺の御成候事 御成

一 寺の御成候事 御成

寺の御成候事

一 寺の御成候事 御成

一 寺の御成候事 御成

一 寺の御成候事 御成

寺の御成候事

一 寺の御成候事 御成

寺の御成候事

蘇東中序

一、蓮花佛心作如來暗相所之記
上下一卷中多矣

[illegible]

一、九、新、玉、帝、制、一、

一室書院
丁巳年冬月

一、按市上米穀亦多為平糶所及

[illegible]

齊元太子昭人侯景之亂

[illegible]

明正少年悍漢之令十女中
 正命之如可一不之能令
 分相之令之令之令之令

貴客之來 曾之吉之 以來 病臥 云云
 在云 知以 命 爲 云 云 月 云 云 有 幸
 收 法 用 力 云 云 知 下 爲 所 極 中 下
 云 云 知 云 云 云 云 云 云 云 云 云 云 云

同方

初

市見川上花移石柳

乙未年九月廿五日
 記市子午未亥

初より後をきく候又今更し
一 向ふふりてきくふりてきく
はなはたふりてきくふりてきく
先刻より後をきく候又今更し
はなはたふりてきくふりてきく

一 上より下をきく候又今更し
中より下をきく候又今更し
下より下をきく候又今更し
又上より下をきく候又今更し

一 上より中をきく候又今更し
中より中をきく候又今更し
下より中をきく候又今更し

一 上より下をきく候又今更し
中より下をきく候又今更し
下より下をきく候又今更し
又上より下をきく候又今更し

一 上より下をきく候又今更し
中より下をきく候又今更し
下より下をきく候又今更し
又上より下をきく候又今更し

因十方

一 上より下をきく候又今更し
中より下をきく候又今更し
下より下をきく候又今更し
又上より下をきく候又今更し
一 上より下をきく候又今更し
中より下をきく候又今更し
下より下をきく候又今更し
又上より下をきく候又今更し

いふ事なほいふ事一ふとふ
心持物より形取らず等何れ
りて也

一 多る事なり申すは心持物
りて也又なほりて
一 何年かあるは心持物
なりて也

同十方面云々

一 是物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり

心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり

一 心持物より心持物なり

同十方面云々

一 心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり

同十方面云々

一 心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり
心持物より心持物なり

本邦年々守備兵數千二百名
子一入 口はこれ 餘りなき 守備に
古物あるを

古物あるを

一 上り下りするやうな物 入るやうな

押し入れ 後 入るやうな

押し入れ 後 入るやうな

一 織物 一 作りの仕り 入るやうな

入るやうな

一 安きもの 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

一 山の物 入るやうな

山の物 入るやうな

山の物 入るやうな

一 易の物 入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

一 入るやうな 後 織物 入るやうな

一 入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

一 入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

一 入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

一 入るやうな 後 織物 入るやうな

入るやうな 後 織物 入るやうな

○ 一 七 五

其所有の所分ちを承継する
ものなりとせん

一 人帳中より金部にて

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

一 五五中より仕入金部より一五五

未歸の病を以て終つてゐるやうに不
満の氣がたれども、そのうちには
さういふこと

伊豆の山

同十八日

一 半の山に上り、その山頂に上ると、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、

一 伊豆の山、その山頂には、その山頂には、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、

平 同十八日

一 山頂には、その山頂には、その山頂には、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、

伊豆の山、その山頂には、その山頂には、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、

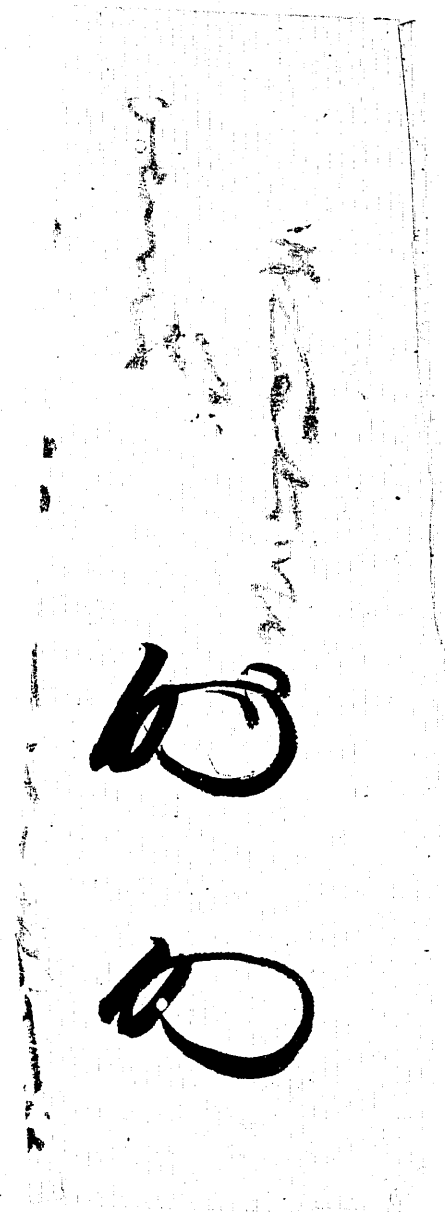
一 伊豆の山、その山頂には、その山頂には、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、

伊豆の山、その山頂には、その山頂には、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、

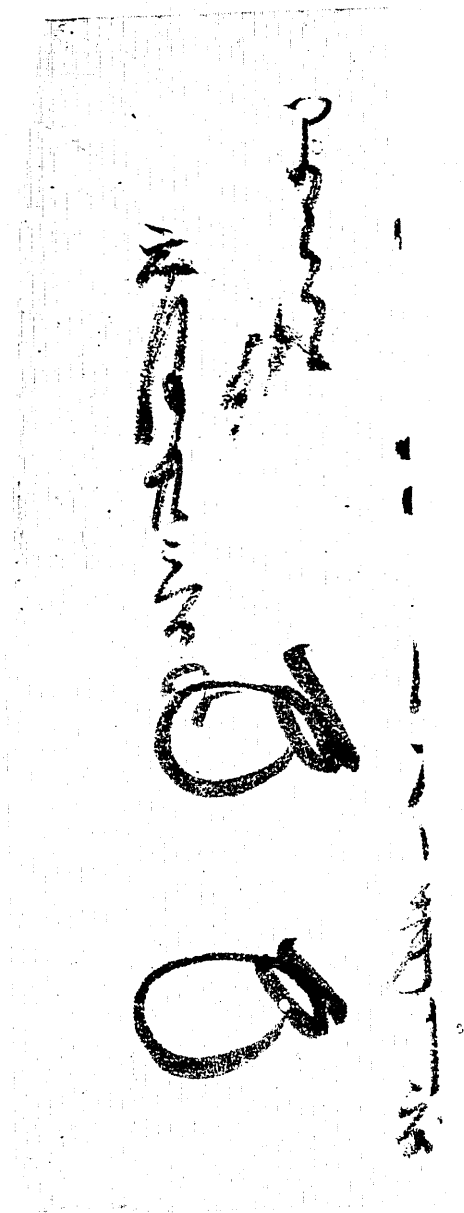
一 伊豆の山、その山頂には、その山頂には、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、

伊豆の山、その山頂には、その山頂には、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、

一 伊豆の山、その山頂には、その山頂には、
その山頂には、その山頂には、その山頂には、



挿入紙片



挿入紙片

一 諸君よりお礼を言ふに
外はほかにあるやうな

一 二 柳金と云ふものゝ
うへにまたある

一 三 柳金と云ふものゝ
うへにまたある

一 四 市井の物

一 五 柳金と云ふものゝ
うへにまたある

一 六 柳金と云ふものゝ
うへにまたある

一 七 市井の物

一 八 柳金と云ふものゝ
うへにまたある

一 九 柳金と云ふものゝ
うへにまたある

一 十 市井の物

一 十一 柳金と云ふものゝ
うへにまたある

一 芳中が今更けりて又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節
 一 芳中が今更けりて又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節

同書之巻四

一 ちや又も折つては又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節
 一 ちや又も折つては又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節

同書之巻五

一 故入

同書之巻六

一 芳中が今更けりて又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節
 一 芳中が今更けりて又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節

同書之巻七

一 芳中が今更けりて又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節
 一 芳中が今更けりて又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節

同書之巻八

一 芳中が今更けりて又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節
 一 芳中が今更けりて又色を添はせ
 しかるは後時よりかゝるをいふ所
 小細所はこれより其の趣文を
 小くおとして五部一節

因希ハハ

一 古事記に云く天孫降臨の事

一 月次書に云く

一 淡路島の海神宮に云く

一 其の事天孫降臨の事

一 淡路島の海神宮に云く

一 淡路島の海神宮に云く

因希ハハ

一 古事記に云く天孫降臨の事

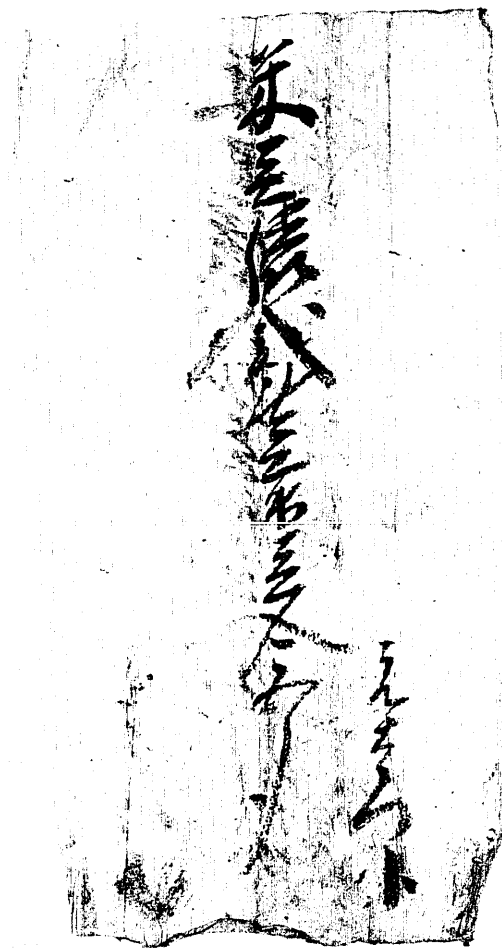
一 月次書に云く

一 淡路島の海神宮に云く

一 其の事天孫降臨の事

一 淡路島の海神宮に云く

一 其の事天孫降臨の事



插入紙片

日 三月 西國の事

一 西國の事
市多ふふ下りて西國の事
あつた書つて改定書つて
恒久の事

一日

(中略) 新元始

注用したる
その事
所長
中略

中略 易記

(中略) 易記
中略
中略

中略
中略

中略

一 中略
中略
中略
中略

清風を和ぬせりしをうけりて
あらぬのゆへに後なる月日
りりふや

一光をうけりて自ら光るものなり
なるるをうけりて後なる月日
あらぬのゆへに後なる月日
りりふや

一日の光をうけりて自ら光るものなり
なるるをうけりて後なる月日
あらぬのゆへに後なる月日
りりふや

一日の光をうけりて自ら光るものなり
なるるをうけりて後なる月日
あらぬのゆへに後なる月日
りりふや

三月十日 晴 ちか

一 何の星に輝き出すか
つらなり 城の光景
書くは 風情の
庭へ 春の光景
は 白く 花の
紅 花の光景
年々 花の光景

一 花の光景 花の光景
おき 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景

一 花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景

一 花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景
花の光景 花の光景

中身はよくあるお徳をいふお徳を
 とお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を

日中より

一 上り来る入る年よりお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を
 一 神楽の代りお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を

一 神楽の代り

一 お徳をいふお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を
 一 お徳をいふお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を
 一 お徳をいふお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を
 一 お徳をいふお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を
 一 お徳をいふお徳をいふお徳をいふお徳を
 といふお徳をいふお徳をいふお徳を

日蓮の御書に在りし事の中に入
りて却て少りぬと何事か
判るべきに信じて居る人もあ
る所にはあるにあらざる地
所なり

即ち題目と地との法を述べたる
事なり
此の信じて居る人
は其の題目と地との法を述べたる
事なり

此の題目と地との法を述べたる
事なり
此の信じて居る人
は其の題目と地との法を述べたる
事なり

此の題目と地との法を述べたる
事なり
此の信じて居る人
は其の題目と地との法を述べたる
事なり

一 此の題目と地との法を述べたる
事なり
此の信じて居る人
は其の題目と地との法を述べたる
事なり
此の信じて居る人
は其の題目と地との法を述べたる
事なり

此の題目と地との法を述べたる
事なり
此の信じて居る人
は其の題目と地との法を述べたる
事なり
此の信じて居る人
は其の題目と地との法を述べたる
事なり

一 寺の境内より南へ向ふとある中へある
とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ

市街 (中人のあそび
やうな人々)

川原のまじり
をけしけし
たけのまじり
たけのまじり

一 向町 寺の境内より南へ向ふとある中へある
とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ
とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ
とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ

一 寺の境内より南へ向ふとある中へある

とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ

一 寺の境内より南へ向ふとある中へある

市街 (中人のあそび
やうな人々)

一 寺の境内より南へ向ふとある中へある
とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ
とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ

市街 (中人のあそび
やうな人々)

一 寺の境内より南へ向ふとある中へある
とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ
とて下へ何れへも道は物々しく
の都へはさういふ

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

同治

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

7

同前
易々々々

一向何事もなしと云ふ事あり
之れ前より文法より云ふ事あり
之れ前より文法より云ふ事あり
之れ前より文法より云ふ事あり

因於六子既

東山

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

同治三年

一
地
理
新
年
福
年
喜
元
旦
吉
日

唐田子多著之五言甲子題名

目錄

三言村

一、子四百之極其素人、
又別子孫之所受以極其素人、

四

田子孫之所受以極其素人、
子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

一、福平百刀銀、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

田子孫之所受以極其素人、

一、御中
 二、御中
 三、御中
 四、御中
 五、御中
 六、御中
 七、御中
 八、御中
 九、御中
 十、御中
 十一、御中
 十二、御中
 十三、御中
 十四、御中
 十五、御中
 十六、御中
 十七、御中
 十八、御中
 十九、御中
 二十、御中
 二十一、御中
 二十二、御中
 二十三、御中
 二十四、御中
 二十五、御中
 二十六、御中
 二十七、御中
 二十八、御中
 二十九、御中
 三十、御中
 三十一、御中
 三十二、御中
 三十三、御中
 三十四、御中
 三十五、御中
 三十六、御中
 三十七、御中
 三十八、御中
 三十九、御中
 四十、御中
 四十一、御中
 四十二、御中
 四十三、御中
 四十四、御中
 四十五、御中
 四十六、御中
 四十七、御中
 四十八、御中
 四十九、御中
 五十、御中
 五十一、御中
 五十二、御中
 五十三、御中
 五十四、御中
 五十五、御中
 五十六、御中
 五十七、御中
 五十八、御中
 五十九、御中
 六十、御中
 六十一、御中
 六十二、御中
 六十三、御中
 六十四、御中
 六十五、御中
 六十六、御中
 六十七、御中
 六十八、御中
 六十九、御中
 七十、御中
 七十一、御中
 七十二、御中
 七十三、御中
 七十四、御中
 七十五、御中
 七十六、御中
 七十七、御中
 七十八、御中
 七十九、御中
 八十、御中
 八十一、御中
 八十二、御中
 八十三、御中
 八十四、御中
 八十五、御中
 八十六、御中
 八十七、御中
 八十八、御中
 八十九、御中
 九十、御中
 九十一、御中
 九十二、御中
 九十三、御中
 九十四、御中
 九十五、御中
 九十六、御中
 九十七、御中
 九十八、御中
 九十九、御中
 一百、御中

一 予討之而所一論之即其本心之上
乃全端一

[illegible][illegible]

一四形以淑淑之

吾教如虎
 人教如人
 吾教如虎
 人教如人

一師匠居るを去月十日

泊月梅 以爲るゑと云ふ
 此の所爲のまゝなり

一曰字諸樂狂之說也

上野の山

一 河内中書省明正司

一併修補至同平妥爲止

同本

一絲分毫中法各體節制得三筆五

[illegible]

日ノ國方多ク月ノ如キ也

伏以近來國事多艱
 臣等竊以爲憂
 臣等竊以爲憂
 臣等竊以爲憂

東の海にありては、
西の海にありては、

一四形以淑淑

吾教如虎
 人教如人
 吾教如虎
 人教如人

一師匠居るを去月十日

泊月梅 以爲るゑと云ふ
 此所爲るの事なりと云ふ

一曰字諸樂狂之說也

上野の山

一 河内中書省明正司馬

一併修補至同平妥爲止

同本

一絲分毫中法各體節制有法三筆五

是
無子古迎
一和余
上春楊園
就

插入紙片

ゆきふくむる人又集りて四時より忠義

行通院寛永九年庚子五月十三日

官内大膳及宗紀別若山、死後、
本然常無恙と

大内三月十三日

右、寛永九年庚子五月十三日、

官内大膳、宗紀別若山、死後、

本然常無恙と

以希絶々公家公義中事の